





















閩方言と同じく、粵方言の否定辞の体系も2つではなく、3つの形式からなっており、それが“唔”“冇”“未”である。この邵敬敏他(2010)の第一編第七章における否定辞には、国際音声記号がついていないので、正確な発音は分からないが、“冇”は普通[mo]か[mau]と発音するので、“嘛[ma]”と共通した子音を持っており、“嘛[ma]”が北京語の「吗」のように、古代中国語の「無」から文法化して生じた可能性が高い。したがって、粵方言のイエス・ノー疑問文の構文パターンは、北京語と同じく、「新旧“V+否定辞”併用型」と考えるべきであろう。

一方、粵方言の“嘛[ma]”と北京語の「吗」の違いは大きな意味を持つとも考えられる。「吗」が唐代の「無」から来たということが定説になっていても、唐代の「無」がそもそも不信という傾きを持つ疑問を表わせたのであろうか。まず唐代の「不」、「無」、「未」や、「閩南方言」の“怀(不)”、“无”、“未”といった3つの否定辞はともに文末に使われる段階があり、それから、「閩東方言」のように、“怀(不)”を除く“无”と“未”の2つだけが文末に使われるようになる。その次の段階で、“无”と“未”が混同して一つになり、粵方言の“嘛[ma]”と化し、それがさらに怪しむ意味の傾きを持つ疑問をも表せるようになり、北京語の「吗」として定着するという文法化の経路を想定してみたいが、全くの空想であろうか。

### 3-7 陝北方言

上にも述べたように、陝北方言についての記述は、邵敬敏他(2010)の第一編に入っているのではなく、第二編に入っている。七大方言説における北方方言は、大きく「華北方言、西北方言、西南方言、江淮方言」の4つに分けられ、北京語が「華北方言」属するのに対して、陝北方言は「西北方言」に属する。なお、十大方言説を取れば、この陝北方言の一部は晉方言に入り、一部は北方方言における「中原官話」に入るかと思われる。以下、北京語と比較したその記述を見てみよう。

(北京話的)是非問則有两种形式，一是采用表疑问的上扬语调，二是句尾带上疑问语气词“吗”或“吧”。陝北方言典型的是非問句只有第一种，而没有第二种，但多出来一种类似于正反问的形式表达是非选择的格式“VP·Neg?”。

(pp.150)

(省略—笔者)

从语义功能考察，我们发现“VP·Neg?”式问句的问话和答语跟普通话的是非问句基本对应，其句尾的“不”、“没”语义已经虚化，跟普通话的“吗”字作用相当。试比较：

陝北方言	普通话
问:今天是二月二不?	今天是二月二吗?
答:是嘞。/不是。	是的。/不是。

(省略—笔者)

问:给花浇水来来没?	给花浇水了吗?
答:浇来来。/没浇。	浇了。/没浇。

(pp.152)

要するに、北京語のような“吗”を用いた「正反问句/反复问句(反復疑問文)」はないが、“VP-Neg?”、本稿の言い方に置き換えれば、「V+否定辞」がその代わりに用いられ、機能的には北京語の“吗”を用いた「正反问句/反复问句(反復疑問文)」と異なるところがなく、否定辞の“不”と“没”の意味がかなり漂白化しているのではないかということである。

否定辞が3つから2つになっているのは、北京語と同じだが、“不”も“没”もそのまま疑問マーカのように文末に使われ、また、答えとしても使えるのは、むしろ「閩南方言」と同じく、唐代の中国語の様子を保っていると言える。したがって、この方言のイエス・ノー疑問文の構文パターンは、閩方言と同じく、「V+否定辞’一色型」と言うべきであろう。

#### 4 まとめ

北京語を検討した第2節に続き、第3節では、引き続き邵敬敏他(2010)に基づき、中国語の7つの方言のイエス・ノー疑問文の構文パターンについて、考察を加えた。その結論を一つの表にまとめると、次のようになる。疑問マーカが中立的疑問とそうでない疑問に分かれているときには、中立的疑問を担うものを示す。

	否定辞	(1)疑問に使われる否定辞 (2)疑問マーカ	イエス・ノー 疑問文の構文パターン
北京語	不[pu]、没[mei]	(1)不[pu]、没[mei] (2)吗[ma](否定辞から)	新旧“V+否定辞”併用型
呉方言	勿[vəʔ]	(1)勿[vəʔ] (2)口伐[va](否定辞から)	新旧“V+否定辞”併用型
湘方言	唔[n]、冇[mao]	(1)唔[n]、冇[mao] (2)喃[na]、喃嘞[nalə]	“V+疑問マーカ”・“V+否定辞”併用型
贛方言	不[pu]、冇[mao]	(1)不[pu]、冇[mao] (2)墨[mæ](否定辞から)	新旧“V+否定辞”併用型
客家方言	唔[n]、冇[mao]	(1)唔[n]、冇[mao] (2)么[mo](否定辞から)	新旧“V+否定辞”併用型
閩方言	怀、无、未	(1) (怀)、无、未 (2) (怀)、无、未	“V+否定辞”一色型
粵方言	唔、冇、未	(1)唔、冇、未 (2)嘛[ma](否定辞から)	新旧“V+否定辞”併用型
陝北方言	不、没	(1)不、没 (2)不、没	“V+否定辞”一色型

新旧“V+否定辞”併用型かどうかを決める推理の過程において、飛躍があることは認める。だが、論理的に考えても、“V+否定辞”一色型、新旧“V+否定辞”併用型、“V+疑問マーカ―”・“V+否定辞”併用型の3型しかありえない。冒頭に述べたように、典型的な孤立型 SVO 言語のイエス・ノー疑問文では、「正反並列型」というまったく別のパターンが用いられるが、“V+否定辞”一色型はつまりこの「正反並列型」なのである。「V」と「否定辞」がそれぞれ「正」と「否」なのである。つまり、現代中国語の一部の方言では、少なくともイエス・ノー疑問文の構文パターンにおいては、典型的な孤立型 SVO 言語の振る舞い方をしているのである。そして、新旧“V+否定辞”併用型はこの典型的な孤立型 SVO 言語の振る舞い方からある程度ずれ、“V+疑問マーカ―”・“V+否定辞”併用型はさらに遠ざかっていることになる。

しかし、“V+否定辞”一色型、新旧“V+否定辞”併用型、“V+疑問マーカ―”・“V+否定辞”併用型の3型は、必ずしも南から北へと分布をなしているわけではない。この意味では、以下のような、橋本(1978)の捉え方の射程を超えた事態となっている。

さて、この点でまことに興味深いのは、アジア大陸に話されている言語である。北部に話されている言語はツングース語といいモンゴル語といいトルコ語といい、圧倒的に逆行構造に統一されている。……これに対して南部に話されている言語は、タイ諸語であろうとモン・クメール語であろうとベトナム語であろうと大部分が、順行構造の統辞法をもととしている。

(略—著者),

この両者のあいだに分布する「中国語」はけっして等質ではなく、北にのぼればのぼるほどアルタイ語式の逆行構造がみられ、南にくだればくだるほど南アジア語式の順行構造が見られるからである。

(pp.40-41)

広い地域で話されている北方方言をはじめ、“V+否定辞”一色型、新旧“V+否定辞”併用型、“V+疑問マーカ―”・“V+否定辞”併用型の3型の正確な分布を明らかにしてはじめて、典型的な孤立型 SVO 言語の性格が薄れていく理由や過程を突き止めることができるであろう。

典型的な孤立型 SVO 言語の性格と言っているが、この場合の「典型的な」はより「SVO」よりも「孤立型」により掛かっていると思われる。チベット・ビルマ語派の一部の孤立型 SOV 言語にも“V+否定辞”構造が見られるからである。いずれも今後の課題とする。

## 参考文献

- 王占華・一木達彦・苞山武義編著(2004)『中国語学概論』駿河台出版社
- 太田辰夫(1958)『中国語歴史文法』江南書院。後、太田辰夫(2013)『中国語歴史文法 新装再版』朋友書店
- 藤堂明保・相原茂著(1985)『新訂中国語概論』大修館書店
- 西田龍雄(2000)『東アジア諸言語の研究 I』京都大学学術出版会
- 橋本萬太郎(1978)『言語類型地理論』弘文堂
- リンゼイ J. ウェイリー著、大堀壽夫・古賀裕章・山泉実訳(2006)『言語類型論入門 言語の普遍性と多様性』岩波書店
- 范继淹(1982)<是非問句の句法形式>《中国語文》1982(6): 426-434.
- 蒋绍愚・曹广顺(2005)《近代汉语语法史研究综述》商务印书馆.
- 刘月华・潘文娉・故桦著(2001)《实用现代汉语语法 增订本》商务印书馆. 原版《实用现代汉语语法》出版于 1983 年.
- 吕叔湘主编(2015)《现代汉语八百词 增订本》商务印书馆. 原版《现代汉语八百词》出版于 1980 年.
- 邵敬敏他(2010)《汉语方言疑问范畴比较研究》暨南大学出版社.
- 王力(1980)《汉语史稿 修订本》中华书局. 原版《汉语史稿》(北京大学汉语史教材) 出版于 1958 年.
- 张斌主编(2010)《现代汉语描写语法》商务印书馆.
- Dryer, Matthew S. 1992. "The Greenbergian Word Order Correlations." *Language*. 68: 81-138.
- Sadock, Jerrold M. and Arnold M. Zwicky. 1985. Speech Acts Distinctions in Syntax. In Timothy Shopen, (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, 155-196. Cambridge: Cambridge University Press.
- Whaley, Lindsay J. 1997. *Introduction to Typology : The Unity and Diversity of Language*. California: Sage Publications.

本稿は金水敏教授がプロジェクトリーダーを務める国立国語研究所の「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」という共同研究プロジェクトの研究成果の一部である。記して感謝の意を表したい。